



TITLE:

彙報

AUTHOR(S):

CITATION:

彙報. 人文學報 1998, 81: 183-198

ISSUE DATE:

1998-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48514>

RIGHT:

彙 報

1997年（平成9年）1月～1997年（平成9年）12月

研 究 状 況

I 班 研 究

日 本 部

日・中・朝間の相互認識と誤解の表象

班長 J. フォーゲル
山室 信一

日本・中国・朝鮮の三国間には隣接した政治社会として相互の位置づけをめぐる認識上のギャップが存在し、それが時に政治的対立そのものの要因となってきた。もちろん、その背景には様々な事情があり、これを解消することは容易ではない。そうした認識ギャップや誤解が、いかに歴史的に形成され、いかに反復・伝承されてきたか、を洗い出し、その克服の方途を探ることは今日いっそう必要となってきた。本研究では自民族中心主義そのものを前提としつつ、新たな民族間の相互認識をいかにして創出しようという問題意識に立って試行的議論を重ねてきた。しかしながら問題の性格上、研究班内での議論を、当該地域や異なった地域に住む研究者の見解とつき合わせてみるのが不可欠であることは研究会発足時から認識されており、国際シンポジウムの開催を前提とする試行的共同研究として運営された点に、この共同研究の特色があった。その国際シンポジウムを、8ヶ国40名の研究者の参加を得て開催し、また人文科学研究所の夏期講座においても共同研究の成果の一部を発表した。なお、シンポジウムの討議録の公刊をもって本研究は終了する。

班員 飛鳥井雅道 岩井茂樹 落合弘樹 籠谷直人 小林博行 佐々木克 瀧井一博 狭間直樹 水

野直樹 森 時彦 安田敏朗 山本有造（以上所内）
河田梯一 陶 徳民（以上関西大）石川禎浩 季
衛東（神戸大）西村成雄（大阪外大）呉 宏明（精
華大）文 京洙（立命館大）齋藤希史（奈良女子大）
藤永 壮（大阪産大）安富 歩（名古屋大）服部龍
二（千葉大）

4月14日 国際シンポジウム打合わせ

5月12日 近代「国語」論と異言語認識

安田 敏朗

6月9日 国際シンポジウム打ち合わせ

6月27日～29日 国際シンポジウム開催

6月27日

開会挨拶：山本有造

司会：籠谷直人

趣旨説明：山室信一

基調講演：Joshua A. Fogel

相互認識とは何か

セッション①：東アジア世界の枠組と相互認識

司会：陶 徳民

報告1：山室信一 三極間認識の枠組とその表象

コメント：Ronald Toby

報告2：張 啓雄 国際秩序原理の葛藤－
中韓宗藩原理をめぐる袁世凱の名分
秩序観－

コメント：西村成雄

6月28日

セッション②：相互認識のメカニズム

司会：石川禎浩

報告3：金 熙徳 中日相互認識のメカニ
ズムと摩擦の構造

コメント：呉 宏明

報告4：鄭 信哲 中国・南北朝鮮の歴史

的關係と相互認識

コメント：水野直樹

セッション③：転換期の相互認識

司会：岩井茂樹

報告5：黄 自進 辛亥革命と日本－革命
派と支援者との相互認識と誤解－

コメント：狭間直樹

報告6：姜 昌一 近代朝鮮の日本認識－
東学を中心に－

コメント：落合弘樹

6月29日

セッション④：コロニアリズムをめぐる言説

司会：金 文京

報告7：黎 活仁 「国民文学論」と「ポ
ストコロニアル」問題

コメント：齋藤希史

報告8：権 泰億 日帝植民地支配の遺産
に対する韓国人の認識問題

コメント：藤永 壮

セッション⑤：東アジアにおける言説の現在

司会：籠谷直人

報告9：季 衛東 東アジアにおける過剰
防衛の循環における言説の作用
－「ノー」の語り手と聞き手の関係
を中心に－

コメント：文 京珠

総括討論

司会：河田悌一

閉会挨拶：山本有造

地帝国の諸相」(『人文学報』第79号)を刊行し、プ
ロジェクトを終了した。

班員 籠谷直人 水野直樹 安富 歩(以上所内)
木村光彦(神戸大) 近藤正己(近畿大) 副島昭一
(和歌山大) 平井廣一(北星学園大) 松田利彦(神
戸商大) 松本俊郎(岡山大) 山田 敦(学振特別研
究員) 盛田良治(大阪大・院)

異言語接触の場としての十九世紀日本

班長 齋藤 希史

本研究は、19世紀の日本という時空間をさまざま
な言語が接触・混淆した場としてとらえ、そこで何
が生まれ、また消えていったのかを考えるものであ
り、97年3月をもって終了した。報告書は、本研究
の一つの焦点でもあった、幕末から明治・大正に至
るイソップ物語の輸入・翻案・翻訳・借用・応用な
どについて、小項目形式の刊行物として作成される
予定である。舞台は日本にとどまらず、朝鮮・中国・
ロシアにも及び、話題も布教・外国語学習・国語教
育など各方面に展開している。すでに何回かの原稿
検討をへて、98年上半期を目処に刊行される運びで
ある。

班員 飛鳥井雅道 宇佐美 齊 大浦康介 金
文京 藤田隆則(以上所内) 木村 崇 松田 清
(以上総合人間学部) 平田由美 米井力也(以上大
阪外大) 青木稔弥 沈 国威(以上神戸松蔭女子学
院大学) 谷川恵一(高知大) 内田慶市(関西大学)
飯田祐子(神戸女学院大学) 鈴木広光(九州大学)

「大東亜共栄圏」の経済構造 班長 山本 有造
先の山本班『満洲国』の研究』の終了をうけ、
対象を「大東亜共栄圏」に広げようとするものであ
るが、当面は経済構造に分析対象をしばり、intensive
な共同研究を行いたい。「大東亜共栄圏」研究は、
経済史にかぎらず広く日本現代史においていまお
未開拓の分野であり、本研究班の発展の上に、政治・
社会・文化の分析を含むやや大きな共同研究班「大
東亜共栄圏」の研究」を予定している。現在、院生・
準班員を含め約15名のメンバーで隔週水曜日に研究
会を開いている。

なお1997年3月、報告論文集「1940年代日本植民

1月29日 井上勤訳ロビンソンクルーソーにおけ
る翻訳の方法 渡辺ユカリ(ゲスト)
3月19日 報告書作成打ち合わせ

明治維新期の社会と情報

班長 佐々木 克

明治維新期は、おおまかに幕末の旧体制崩壊期と、
明治の新国家建設期とに二分できる。しかし何れに
しろ、変革期であり動乱期である。権力は動揺し、
社会は流動化し人が激しく動き、そして噂・流説な
どさまざまな情報が飛びかう。そこで、権力も組織
も人も、情報を求め、必要とし、かつ自らも発信し
てゆく。幕末や藩当局は、それぞれ独自の情報蒐集

システムを持っていた。しかし伝統のシステムだけでは、新たな状況に対応出来なくなる。また幕府は政治や外交に関しては、情報統制を基本としてきたが、それが崩れて行く。そうしたなかで、知識人や在村のエリート達が、独自のネットワークをもって、情報の蒐集・発信主体として登場し、権力の側は、彼らの存在を無視できなくなる。こうした状況は基本的には、明治期に引き継がれるが、新たな問題も登場する。それは明治政府が、権力が内包する根源的病として、情報を秘匿・隠匿しようとする基本的性格を維持しながら、一方で、政府は民衆に伝えなければならない情報を、如何に早くかつ広く伝達・徹底させるか、すなわち情報公開という重要な課題に直面するのであり、こうした状況のなかで、民衆自体も、新たな課題に就くことを迫られるのである。本研究は、以上のような実態をふまえて、明治維新という変換期における〈情報〉にかかわる諸問題を、総合的に検討してみようという意図しているものである。

班員 飛鳥井雅道 落合弘樹（以上所内）青山忠正（仏教大）奥村 弘（神戸大）小股憲明（大阪女子大）勝部真人（広島大）齊藤祐司（彦根城博物館）佐藤隆一（青山学院高校）鈴木祥二（名古屋大）鈴木栄樹（京都薬大）谷山正道（天理大）塚本 明（三重大）原田敬一（仏教大）母利美和（彦根城博物館）藪田 貫（関西大）山崎有恒（立命館大）岸本 寛（立命館大・院）三澤 純（広島大・院）

10月17日 明治初期の奈良県政と区戸長層－奈良
県会の開設をめぐる－ 谷山正道
10月31日 往復書翰からみた木戸と井上
落合弘樹
11月21日 19世紀日本地誌と歴史情報－『紀伊統
風土記』と『紀伊名所図会』を例とし
て－ 鈴木祥二
12月 5 日 近世・近代移行期村落と金納郷士
三澤 純

言語力の諸相についての試行的研究

班長 横山 俊夫
自然や社会とのかかわりにおいて、言語が力を持つとは、どういうことか。おもに、日本や中国の話し言葉や書き言葉の事例をとりあげながら、この課題の検討を始めた。総合研究の可能性を探るための、一年限りの予備研究である。

同時に、学内教育改善推進費によるセミナー「新発見事物への名づけをめぐる学内共同のこころみ」（事務局当研究所）とも連携をはかり、現代自然科学の専門語の流通力の狭さという問題にも視野をひろげている。

班員 金 文京 小林博行 フィリップ・ハリス
（以上所内）後藤静夫（国立文楽劇場）齋藤希史（奈良女子大）田中貴子（梅花女子大）深澤一幸（大阪大）

1月31日 啓蒙官僚島田三郎 鈴木栄樹
2月28日 情報環境と日清戦争 原田敬一
4月25日 明治6年の出兵論と情報 佐々木克
5月9日 秋良敦之助と「海防」－ある萩藩陪臣
の明治維新－ 岸本 寛
5月23日 明治初年における法令の伝達・周知と
地方行政 鈴木祥二
6月13日 幕末期の政局と京都情報 佐藤隆一
7月25日 <言語と社会>からみた近世～近代の
移行 藪田 貫
8月29日 長州と薩摩－慶応3年後半期の政局と
情報－ 青山忠正
9月26日 幕末維新期における横浜近郊豪農と情
報 佐藤隆一

10月11日 古今和歌集仮名序 全員
中国の語りもの 金
10月25日 古今和歌集仮名序
「やまと歌は」～「成れりける」 小林
方言漫考 横山
11月8日 古今和歌集仮名序
「世中に在る人」～「慰むるは、歌なり」 齋藤
問答体のテクニク－少年の言語力 深澤
11月22日 節用集に出る仮名序の世界 横山
鳥の言語力－いわゆる「聞きなし」に
ついて 小林

人 文 学 報

12月6日 古今和歌集仮名序 浣（帝塚山学院大）丹治恆次郎（関西学院大）ピエール・ドゥヴォー（甲南女子大）原田邦夫（愛知県大）
「この歌，天地の」～「分き難かりけらし」 横山 小山俊輔 三野博司（以上奈良女子大）鈴木啓司（名古屋学院大）
生命科学の用語はなぜ硬いのか

ゲスト・生命誌研究館 加藤和人

12月13日 古今和歌集仮名序 1月13日 原稿検討会（7）小林，多賀の原稿
「人の世と成りて」～「初めにもしける」 ハリス 宇佐美，森本
義太夫狂言の変容－人形浄瑠璃から歌舞伎へ 後藤 1月27日 原稿検討会（8）齋藤，島本の原稿
丹治，小山
2月17日 原稿検討会（9）松島，小西の原稿
原田，小山

3月10日 原稿検討会（10）ドゥヴォー，大浦の原稿 松島，多賀

3月24日 原稿検討会（11）宇佐美の序文と編集方針の検討 全員

西 洋 部

象徴主義の研究

班長 宇佐美 齊

4年間の予定で1993年4月より発足したこの研究班の目標と活動内容の概略は，以下の通りである。

フランスを中心とするヨーロッパの文学テキストを主な対象として，象徴主義が提起した問題とは何かを問うことから始めた。その際，音楽・美術・演劇などの諸芸術との関わり，政治や社会の変動が及ぼした影響，思想史的なコンテクスト，および中国・日本など非ヨーロッパ諸国との比較対象の視点をも重視し，より広い視点からも考察するようにつとめ，ついで，それらの諸問題がその後どのような展開を遂げたかを考えてきた。したがって，時代区分としては当初の計画通り，19世紀中葉から1920年代までを視野に入れて研究を行った。また同時に，分析哲学，精神分析学，社会人類学など人文諸科学における象徴理論についても合わせて考究してきた。研究会は原則として隔週で開催され，口頭発表と討議がなされた。なお1996年秋以降は成果報告書の作成に向けて準備を行って来たが，これは1997年10月にミネルヴァ書房から『象徴主義の光と影』と題して出版された。

班員 大浦康介 齋藤希史 阪上 孝 森本淳生（以上所内）田口紀子 吉田 城（以上文学部）多賀 茂 松島 征（以上総合人間学部）柏木隆雄 上倉庸敬 内藤 高（以上大阪大）吉田典子（神戸大）山路龍天（同志社大）柏木加代子（京都市芸大）小西嘉幸（大阪市大）小林 満（京都産大）島本

アヴァンギャルド芸術の研究

班長 宇佐美 齊

1997年から2001年にいたる4年間の予定で発足した共同研究班である。

20世紀初頭において芸術概念と表現理論とを大きく転換させた，いわゆるアヴァンギャルド芸術を今日的な視点から総合的に再検討することを主眼とする。その場合，文学・美術・音楽・演劇・映画など諸ジャンル相互間の関わり，科学技術の進展，また政治や社会の変動が及ぼした影響，そして思想史的なコンテクストなどに留意しなければならないことはもちろんであるが，同時にこの運動においては世界的な並行現象ないしは波及効果が見られる点を十分に考慮して，西ヨーロッパのみを視野に収めるのではなく，日本・中国・ロシア・アメリカ・その他の諸国との比較対照の視点をも重視しなければならないだろう。なお時代区分としては，20世紀初頭から30年代までを取り扱う。研究会は原則として隔週に開催し，口頭発表と討議とを重ねたうえで，最終年度には論文執筆，報告書の刊行を予定している。

班員 井波陵一 大浦康介 森本淳生（以上所内）篠原資明 松島 征 三好郁朗（以上総合人間学部）吉田 城（文学部）鈴木貞美（国際日文研）丹治恆次郎（関西学院大学法学部）ピエール・ドゥヴォー（甲南女子大学文学部）水田恭平（神戸大学国際文学部）永田 靖（大阪大学文学部）禹 朋子（京

大・院)

- 4月26日 今なぜアヴァンギャルドか。運営方針
をめぐって 宇佐美
- 5月12日 精神(の)分析—ヴァレリー, ブルト
ン, 無意識 森本
- 5月26日 ブルーストにおける新しいノ小説の方
法 禹
- 6月9日 近代中国と西洋思想—王国維の試み
井波
- 6月23日 シュールレアリストのサド受容をめぐ
って 大浦
- 9月29日 アヴァンギャルド芸術としての映画—
ブニュエルとコクトー 松島
- 10月6日 機械仕掛けの仏—稲垣足穂をめぐって
篠原
- 10月20日 梶井基次郎の位置 鈴木
- 11月10日 『春の祭典』をめぐって ドゥヴォー
- 12月1日 ヴァルター・ベンヤミンの言語思想—
＜媒体＞をめぐって 水田
- 12月15日 マティスと批評言語 丹治

コミュニケーションの自然誌(二)

班長 谷 泰

1997年3月の研究班終了とともに、論文集を出版
することをめざして、各分担者の執筆内容を中心
にした報告を昨年に引き続き行い、成果刊行に向け
ての作業に追われた。

班員 田中雅一 串田秀也 藤田隆則(以上所内)
菅原和孝(総合人間学部) 水谷雅彦(文学部) 北
村光二(弘前大) 木村大治(福井大) 高畑由起夫
(関西学院大) 野村直樹(名古屋市立大) 澤田昌
人(山口大) 野村雅一(民博) 早木仁成(神戸学
院大) 細馬宏通(滋賀県立大) 定延利之 山森良
枝(以上神戸大) 宮脇幸生(大阪府立大)

主体・自己・情動構築の文化的特質

班長 田中 雅一

1998年3月の研究班終了とともに、成果出版をめ
ざして、本年は、各分担者の執筆内容を中心にした
打ち合わせを行なった。

班員 谷 泰(以上所内) 松田素二(文学部)
菅原和孝(総合人間学部) 栗本英世 田辺繁治
林 勲男(以上民博) 青木恵理子(鈴鹿国際大) 小
田 亮(成城大) 春日直樹 川村邦光 富山一郎
(以上大阪大) 藤田隆則(大阪国際女子大) 窪田幸
子(広島大) 福浦厚子(滋賀大) 棚瀬慈朗(滋賀県
立大) 中谷哲也(奈良商科大) 西井涼子(東京外大)
渡辺公三(立命館大) 李 仁子 金谷美和 川村清
志(人・環・院) 中谷純江(金沢大・院) 鈴木健太
郎(東大・院)

1月20日 病という主体: ガーナ・アシャンティ
の事例から

田原範子(ゲスト)

2月3日 文化の中継器—グウィの年長男性の
死と妖術の語り 菅原

2月17日 女神の身体・女性の身体(インド・ス
リランカ) 田中

3月10日 過去と現在を媒介する—能の音楽のト
ランスミッション(受け渡し)様式—
藤田

5月26日 民族と国家の間で—タイ・カレン女
性における母性と境界をめぐる選択

速水洋子

7月7日 執筆の打ち合わせ 全員

10月13日 執筆の打ち合わせ 全員

12月8日 執筆の打ち合わせ 全員

1789年人権宣言成立過程の研究

班長 富永 茂樹

この共同研究は「人間と市民の権利の宣言」の成
立過程を詳細に辿りつつ、そこにあらわれる市民概
念を検討することを目的としている。研究の対象と
なるテキストは、1789年7月から8月にかけての国
民議会で議論、また議会の内外で発表された数多
くの人権宣言草案である。今年度から正式に発足し
たこの研究会は、発足前にすでに非公式なたちで
行われてきた読書会での作業を継続しており、さし
あたり主な草案を選定し、その精確な翻訳を作成す
る作業にあたっている。作業の手順は、前もって班
員の一名が下訳を作成し、研究会では別の一名がそ

人 文 学 報

れを批判的に検討して、班員全員で最終的な訳文を決定するというものである。現在までのところ、当初の予定の約三分の二の翻訳が終了している。

班員 阪上 孝 北垣 徹(以上所内) 前川真行
(大阪女子大) 宇城輝人 岡崎宏樹(以上京大研修員)

4月2日	ドラディエヌ案	前川／富永
4月21日	グレゴワール案	宇城／佐藤
5月12日	グレゴワール案	宇城／佐藤
5月26日	ミラボー案	宇城／佐藤
6月9日	ミラボー案	宇城／佐藤
6月23日	確定宣言訳語検討	北垣
6月30日	第六部会案	佐藤／宇城
7月14日	第六部会案	佐藤／宇城
9月8日	デュポール案	佐藤／宇城
10月13日	ラボー・サン＝テチエヌ案	
		富永／前川
10月27日	ラボー・サン＝テチエヌ案	
		富永／前川
11月10日	ガロ案	佐藤／宇城
11月17日	ガロ案	佐藤／宇城
12月1日	シネティ案	佐藤／宇城
12月22日	シネティ案	佐藤／宇城

コミュニケーションの社会史

班長 前川 和也

この研究班は、工業化が本格的に進行する以前のヨーロッパ、東アジア、西アジアでの社会的コミュニケーションの諸問題をとりあげている。今年度は第3年度にあたり、報告書作成の準備にはいった。報告では、主として、情報空間のネットワーク、文字メディアとその変容、コミュニケーション言語の選択と語法、言論と公共性、情報の記録化とその普及にかかわるトピックが議論された。

班員 小山 哲 高田京比子 谷井陽子 田中俊之 富永茂樹 横山俊夫(以上所内) 服部良久 夫馬 進 南川高志(以上文学部) 川島昭夫(総合人間学部) 川北 稔 江川 温(以上大阪大) 井上浩一 大黒俊二(以上大阪市大) 河村貞枝 渡辺 伸(以上京都府大) 阿河雄二郎(大阪外語大) 川本正知(奈良産大) 京楽真帆子(茨城大) 合田真史(甲

南大) 佐々木博光(大阪府大) 渋谷 聡(島根大) 森 明子(民博) 三成美保(摂南大) 山辺規子(奈良女子大) 脇田晴子(滋賀県立大)

1月14日	『老稼斎燕行日記』について－18世紀初頭朝鮮一知識人の中国体験	夫馬
1月21日	「ツンフトなき都市」の都市貴族	田中
4月8日	ウィンドランダ文書の世界－ローマ時代のイギリスにおける生活とコミュニケーション	南川
4月15日	「いま／かつて」という語法について	森
4月22日	手と譜－音を伝える	山辺
5月6日	15世紀末－マントヴァ人の聖地巡礼記	高田
5月20日	明清時代の官報	谷井
5月27日	名誉革命はどのように伝えられたか－旧帝国の情報ネットワーク	川北
6月3日	ヴィクトリア時代中期のフェミニズム諸誌	河村
6月10日	フランス革命と政治的言語－ルーアン第三身分の陳情書を中心に	阪上孝
6月24日	日本中世の猿楽能と文化伝播－老若男女都鄙融合の文化の形成	脇田
7月1日	広域情報伝達システムの展開とThurn und Taxis家	渋谷
7月8日	ヨーロッパ中世の幽霊譚－J. Ch. Schmittの著作を中心に	江川
9月16日	近世異文化間交流の400年－Russell-Woodの著作をめぐって	合田
9月30日	聖餐式と会衆歌	渡辺
10月7日	「神への嘆願」から行政命令まで－古代メソポタミアにおける「手紙」「封筒」と印章	前川
10月21日	「メルクリウシュ・ポルスキ」はなぜ半年でつぶれたか－最初のポーランド語による定期国際情報誌とその周辺	小山
10月28日	『マールー・ヤバラ－ハー3世伝』について－「ローマ訪問記」を中心にして	

11月11日	マルコ・ポーロの書の成立と受容	大黒	川本 立大) 島 岩 (金沢大) 正信公章 (追手門学院大) 高島 淳 (東京外大) 中谷英明 (神戸学院大) 林 隆夫 (同志社大) 引田弘道 (愛知学院大) 増田良介 (大阪外大・非) 松田佑子 (京都産大・非) 矢野道雄 (京都産大) 渡瀬信之 (東海大) 乙川文英 梶原三恵子 (日本学術振興会) 野田智子 村川章子 (以上京大・院) 杉田瑞枝 (京大研修員)
11月18日	方言とつきあうー吾山と三馬	横山	
11月25日	会話と議論ーサロンから民衆協会へ	富永	
12月2日	1. 10世紀のビザンツ外交 2. 次期研究会にむけて	井上 全員	
12月9日	ラテン語からドイツ語へドイツ人文主義時代の民族意識	佐々木	近代社会における研究者の組織化
12月16日	アンシャン・レージュム期フランスにおける書物と社会	長谷川輝夫 (東京経済大)	ー研究所・学会・学派ー 班長 阪上 孝 専門的な国際学会や研究所の設立は19世紀後半に特徴的な現象である。このような研究者の組織化を促した社会的な条件は、国家と科学の緊密な結びつき、「科学国家」ともいうべき国家のあり方が支配的になったことにある。科学に内在する条件についていえば、一つは大量的な観察、調査、比較などが科学研究の中心的な技法になったこと、もう一つは学問の専門分化が学際的な研究の総合の必要を呼び起こしたことである。国により、専門分野により組織化の条件は異なるし、研究者の野心といった要素も無視できないが、いくつかの研究所や学会についての具体的研究を積み重ねて、＜研究者の組織化＞について多少とも普遍的な考察を提起すべく議論を行っている。

インド文化史の諸問題

ー古代インド王権とその周辺ー (1995～1998)

班長 井狩 彌介

政治権力と宗教権威との関係は、世界の各文明地域においてそれぞれ独自の様相をもって展開し、その文明の基本性格と密接に結びついている。古代インドにおいてこの問題は、権力の中心に立つ王と、正統な宗教儀礼伝承を独占するブラーマン知識階級との関係に典型的に現われる。本研究では、本来は独立した文献群として発生した「法典」と「王権政略論」が次第に相互影響を及ぼしつつ歴史的に交差して行く過程を焦点に据える新たな視角から、インド学各分野の専門研究者の協力のもとに、権力と権威との関係構造とその歴史的展開の考察をはかる。叙事詩『マハーバータ』の「ラージャダルマ (王法)」章 (XII, 1-128) に焦点をあて、隔週に行われる研究会ではテキストの会読形式を中心として研究が進められている。本年度は12月までに同章XII, 85までの検討を終わった段階で、叙事詩にあらわれる王権の諸側面が関連文献の記述との比較のもとに扱われてきた。

班員 荒牧典俊 藤井正人 船山 徹 村上昌孝 山下 勤 (以上所内) 徳永宗雄 御牧克己 (以上文学部) 赤松明彦 (九州大) 永ノ尾信悟 土田龍太郎 (以上東京大) 榎本文雄 井上信生 (以上大阪大) 狩野 恭 (神戸女子大) 黒田泰司 八木 徹 (以上大阪学院大) 後藤敏文 (東北大) 後藤純子 (大阪市

班員 上野成利 大浦康介 北垣 徹 瀧井一博 田中雅一 富永茂樹 (以上所内) 川島昭夫 (総合人間学部) 崎山政毅 (農学部) 上山隆大 (ウェルカム研究所) 川越修 (同志社大) 小林清一 (滋賀県立大) 光永雅明 (神戸市外大) 中岡哲郎 (大阪経済大) 西川長夫 渡辺公三 (以上立命館大) 前川真行 (大阪女子大) 水嶋一憲 (関西学院大) 牟田和恵 (甲南女子大) 富山一郎 山中浩司 (以上大阪大) 宇城輝人 (京大研修員)

1月24日	まとめの方向をめぐって	阪上
2月28日	共同調査ーブース『ロンドン民衆の生活と労働』を題材に	光永
3月14日	共和国の科学と道徳	北垣
4月25日	国家、科学、教育ー第二帝政期のパスツール	富永
5月9日	グロートヤーンの社会衛生論	川越

5月23日	フランクフルト学派と＜母性的なるもの＞のユートピア	上野	中国音韻史の研究	班長 高田 時雄
6月6日	民族衛生学の系譜	田中	本研究班は一般の書目には著録されることの稀な	
6月20日	失業問題の組織化	宇城	明清の韻学関係の書物を取り上げ、序跋や凡例を読	
7月11日	ロックフェラー財団とロックフェラー生命科学研究所	小林	みつつ、その資料的性格を闡明し、明清の音韻史を	
9月19日	『統治技法の近代』合評会	全員	辿ろうとするものである。最終的には『小学考』の	
10月3日	社会政策という言説	前川	補編ともいうべき明清の音韻学書の提要の作成を目的とする。	
10月24日	クーザンと制度としての哲学	大浦	分館改修工事のため、暫時休会していたが、夏休み明けから再開し、フランソワーズ・ボッテロ、銭	
11月7日	統計協会におけるブース	光永	曾怡、木津祐子、張猛の各氏の報告を得た。	
11月21日	万国博覧会と国際会議	北垣	研究班の成果は当面、論文集『中国近世の音韻学』	
12月12日	『アナール』誌の誕生	阪上	として取りまとめる計画である。	

東 方 部

唐宋美術の研究

班長 曾布川 寛

1995年4月から5カ年計画で始まった本研究は、隋・唐・五代・北宋の美術全般についてより精確な理解を目指す。特に繁栄の極に達した盛唐美術を中心に、初頭からそこに至った過程、またそこから一転して写實的な山水・花鳥画に代表される宋代美術を生むに至った背景などを探る。具体的な方法としては出土や伝世の文物、石窟寺院の仏教美術、画論・書論の芸術論を三本の柱として、発表と会読を交えて進めていく。本年の芸術論の会読は『益州名画録』（宇佐美文理担当）、『五代名画補遺』（河野道房担当）を取り上げた。

譯經僧傳研究

班長 桑山 正進

訳経僧とは、インドや中央アジアから中国にやってきて、經典漢訳に参画した仏教僧である。かれらに関する情報は『高僧傳』『續高僧傳』『宋高僧傳』などに編纂されている。これらの伝記を班員の専門分野である歴史、言語、宗教、美術など多角視点をもって読解検討し、4世紀－8世紀の、中央アジアから南アジアにわたる地域の歴史、文化、その他おおくの情報を引き出すことを目的とする。あわせて抛るべき現代語訳を作成する。研究会は1996年4月から2001年3月まで隔週の月曜日（2時－5時）に文献センター会議室で開催。

中国技術の傳統

班長 田中 淡

「中国技術史の研究」に引き続いて、1996年から5年間の計画で、中国技術の伝統と特質について検討を加えてゆく。基本的には生活科学技術を中心とするが、しかし前研究班の過程で臚げながらみえてきた中国技術史における研究課題は、特定の時代、分野に偏重しない。一般的には、技術と科学の相関、技術者と社会、生活科学の特質、少数民族の技術、等々の主題に関わるであろうし、個別的には、農業、医学、土木建築、紡績、数学、天文学、化学、その他の領域に拡がるであろう。会読のテキストとしては、引き続いて元・王楙の『農書』の農器図譜の訳注作成をすすめてゆく。並行して、技術史の諸分野にわたる班員の研究発表を臨時おこなう。

中国の礼制と礼学

班長 小南 一郎

当研究班では、周礼を賈公彦疏によって読み、経文と鄭玄注に和訳と注釈を施すと同時に、そこに記述されている礼制度やその関わる器物などについて資料を集め、検討を加えている。本年の会読は、周礼春官篇の最後に近い部分にまで進み、車馬制度などについて考えた。

唐代宗教の研究

班長 吉川 忠夫

前年にひきつづいて唐の神清撰『北山録』全10巻の会読を行い、担当の班員が準備した訳注稿を検討しながら、巻5「釈寶問」の半ばまで読み進んだ。その間、11月19日には福永光司氏を講師に招き、

「親鸞の『教行信証』化身土巻末と唐の法琳『弁正論』」と題する話をうかがった。

啓超論が披露され、研究報告用の論文が基本的に揃ったといえる。

文献と情報

班長 勝村 哲也

研究方法と状況は昨年と変りがない。本年も改修工事で書庫の使用ができないため文献班の仕事は調査に比重があった。建仁寺両足院は尾崎、牧野が、対馬宗家及び琉球尚家の蔵書は勝村が主として担当した。10月に金、木島、小林、池田、藤本、森田がソウルに、11月に勝村がパークレイに訪書旅行をした。安平秋教授及び所内の木島が研究発表を行った。

情報班は丹羽、勝村を中心に約六万の漢字フォントを公開利用するための研究開発にあたった。9月10月には謝清俊、謝瀛春教授を招請し、電子漢字の国際化をめざして共同研究を進め、学術情報センター、国際高等セミナーハウスで二度、研究所で一度の検討会と報告会をもった。チャールス・ミュラー、ルイス・ランカスター教授等の参加を得た。

辺境出土木簡の研究

班長 富谷 至

私たちの研究班は、居延漢簡や敦煌漢簡などの出土資料を古文書学的手法を通して読み解くことを課題としている。本年度は昨年度に引き続き、『敦煌漢簡』（甘肅省文物考古研究所編、1991年、北京、中華書局）をテキストとして採り上げた。木簡現物によって研究することのできない私たちは、次善の策として同書所収の写真図版による会読を行い、同書の釈文とは別途に新しい釈読・注解の作業を進めている。次年度からはいよいよその取り纏めの作業に入るであろう。

梁啓超の研究

ーその日本を媒介とした西洋近代認識についてー

班長 狭間 直樹

「梁啓超の研究」は、中国の近代世界認識形成、および近代西洋学術文化の摂取に多大な貢献をした梁啓超の西洋近代文明摂取の過程を、その窓口になった日本の媒介作用に着目して研究しようとしたものだった。本班は論文執筆の準備のために1年延長し、本年度は論文原稿の提出とその討議にあてられた。ここ3年の研究蓄積の上に、多くの新知見を含む梁

中国共産主義と日本：思想・運動・戦争

班長 狭間 直樹

現在の中国が中国共産党の支配する「共産主義」の国家としての中華人民共和国であることは、明白な事実である。中国近代史の一つの帰結としてこの中華人民共和国の誕生にいたる経過を振り返るには、20世紀において独特の歴史現象と出現した世界の共産主義との関連でとらえねばならぬことは言うまでもないとして、そのさい東アジアにおける日本（朝鮮を含め）との密接なかかわりの探求がとりわけ必要とされるのである。本研究は、中国共産主義のありようを日本との関連において、思想・運動・戦争の諸側面から迫ろうとするものである。

中国近代の都市と農村

班長 森 時彦

都市と農村の関係を主軸にロングスパンで中国近代史を縦断的にとらえなおし、前近代から現代にかけての中国の社会変動を巨視的に分析する視座の形成をめざして、1993年に5カ年計画でスタートした本研究班は、いよいよ最終年度を迎え、研究成果のとりまとめに向けて準備作業に入った。とくに9月以降は、報告論文集に執筆を予定している班員に論文の草稿を提出していただき、全員でその検討を重ねる作業にほとんどの時間をさいた。全般的な傾向としては、やはり中国近代化の先端をきった地域である長江デルタ、珠江デルタに関心が集まり、農工商の各方面から両地域における都市と農村の関係を解明する新知見のもりこまれた論文が出揃いつつある。

北朝後半期仏教思想史研究

班長 荒牧 典俊

北朝後半期のいわゆる「地論宗文献」である敦煌写本、スタイン文書613及び4303のテキストを確定し訓読する作業が終了した段階で、そこに見られる仏教思想史の展開が、結局は『大乘起信論』へと完成されるということが明らかになってきたので、急遽、『大乘起信論』を訓読し現代語訳しなおし、その思想史的位置を確認する作業に入った。そのこと

人 文 学 報

によって『大乘起信論』の哲学思想が「北宗禅」へと継承され、さらに六祖慧能の禅が成立するに至るという思想史の見通しが得られるのではないかと考えたのである。次年度は、この作業を継続することと併行して、班員の報告論文の予備発表を行う予定である。

客 員 部 門

東アジアの日常における両界媒介事象の比較研究

班長 三浦 國雄

最終年度の最後の3カ月は、下掲のように5回の研究会・8件の発表をこなす精励ぶりであった。さらにそれと並行して、97年の1月には、横山班員の主宰する第8回京都国際セミナー〈安定社会の総合研究〉で“なかだち”をテーマに取り上げてもらい、以下の班員が参加し、発表等を行った。

横山 総 括

色道における和合持続の智恵

藤井(讓) 講 評

金 東アジアにおける中間的知識人の地位と活動

三浦 媒介としての気

詳細は、京都ゼミナールハウス発行『安定社会の総合研究—ことがおこる・つづく／なかだちをめぐる』(1997年6月)を参照されたい。

また、班員のうち、“媒介の島”沖縄に関心を寄せる者が相諮り、「久米島における東アジア諸文化の媒介事象に関する総合研究」という長々しいタイトルをつけて科研費を申請したところ、認可され、現在その活動が進展していることを附記しておく。“媒介”への道は、3年で踏破しうるほど生易しくはないのである。但し、次年度内に報告書刊行を果たしたい。

班員 木島史雄 金 文京 齋藤希史 瀧井一博
藤井正人 藤田隆則 横山俊夫(以上所内) 北畠直文(食糧科学研) 藤井讓治(文学部) 梅谷繁樹(園田学園女子大) ミヒャエル・キンスキー(チュービンゲン大) 後藤静夫(国立文楽劇場) 塚本 明(三重大) 都築晶子(龍谷大) 西山 克(京都教育大) 羽賀祥二(名古屋大) 原田禹雄(もと邑久光明園)

深澤一幸(大阪大)

1月25日 山林苦行者の両界性

—世間と出世間のはざま—

藤井(正)

過去(連続したもの)と現在(一回性のもの)を媒介する —能の音楽のトランスミッション(受け渡し) 様式—

藤田

2月1日 パンスー朝鮮の盲僧

ゲスト・大阪市立大学 野崎充彦

2月8日 大織冠破裂

西山

崇伝による日選び

藤井(讓)

2月22日 文案—人形浄瑠璃—その成立と展開

後藤

3月8日 歳時と詩文—上巳の節句から— 齋藤

蔡温の修身論—客気者、邪逆之巧媒也—

都築

植民地主義と人類学

班長 山路 勝彦

人類学とその周辺諸科学の発展は、西欧による非西欧地域への政治・経済的進出と密接に結びついてきた。しかし、それは単純に人類学が植民地支配の道具であった、ということの意味しているのではない。また日本と東アジアを中心とする、植民地支配も多くの複雑な問題を含んでいる。こうした問いかけに答えるために当研究会が組織された。初年度は1回に2名の報告という形で各自の問題意識を語ることで、情報と問題群の共有に努めた。

班員 田中雅一 水野直樹 安田敏朗 山室信一
山本有造 Timothy Tsu(以上所内) 松田素二(文学部) 江口信清(立命館大) 荻野昌弘(関西学院大) 奥野克巳 橋本和也 細谷広美(以上京都文教大) 春日直樹(大阪大) 窪田幸子(広島大) 栗本英世(民博) 小林致広(神戸市外大) 小松和彦(国際日文研) 高岡弘幸(関西学院大) 富山一郎(大阪大) 福浦厚子(滋賀大) 元木淳子(大阪外大) 森木和美(薫英女子大) 安井真奈美(大阪明浄女子短大) 脇村孝平(大阪市大) 李仁子 金谷美和 川村清志(人・環・院)

4月21日	文明の神聖なる信託のもとで——同化論、先住民問題、そして植民地主義と人類学	山路橋本	Ⅱ 個人研究 日本部	
5月19日	キリスト教と植民地主義 日本人の見たアフリカのイメージ	栗本		
6月2日	「琉球民族」という主体 植民地主義の生成——19世紀「日本」における3つの他者像	富山萩野	日本近代文化の研究 一九世紀における明治維新 「日本植民地帝国」の経済史的研究 前近代日本の文明史的研究	飛鳥井雅道 佐々木 克 山本 有造 横山 俊夫
6月16日	植民地主義と家父長制度 19世紀インドにおける宗教と政治	森木	近代東アジアにおける日本の法と政治 近代朝鮮の政治と社会 戦前期日本の工業化と華僑ネットワーク 土族の研究	山室 信一 水野 直樹 籠谷 直人 落合 弘樹
7月14日	植民地主義の文化と暴力 食人と他者理解——宣教師の見たフィジー人	松田	ドイツ国家学と近代日本 近代日本の言語政策 江戸時代天文暦学の文化史的研究	瀧井 一博 安田 敏朗 小林 博行
10月20日	仏教、かくも長き不在——韓国<伝統>文化の表象における植民地主義と文化人類学(民俗学)者	岡田	西洋部	
	未墾地の記憶——メキシコ・チアパス州東南部における先住民族意識の形勢	小林		
11月10日	オーストラリアの植民とミッション——フィールドから見たキリスト教	窪田	知識と社会制度 シュメール行政・経済文書の研究 古代インド・ヴェータ祭式の構造と歴史的展開の研究	阪上 孝 前川 和也 井狩 彌介
	植民地的状況下における他者と恐怖——アンデス妖怪ピシュタコをめぐるうわさの分析	細谷	フランスの詩学 フランス革命と近代的主体の成立 南アジアの宗教と社会 文学理論の研究	宇佐美 齊 富永 茂樹 田中 雅一 大浦 康介
11月17日	ニューディール期のインディアン政策における人類学者の関与について	酒井啓子	後期ヴェーダ文献の成立史研究—ブラーフマナからウパニシャッドへ— 初期近代ポーランドの政治文化 フランクフルト学派の政治思想	藤井 正人 小山 哲 上野 成利
	アフリカ文学と植民地主義——女性作家の視点から	元木	中世イタリアの「家」 共和国の法と道徳—フランス第三共和政期における共和思想と新カント派— ポール・ヴァレリーと二〇世紀フランスの思想	高田京比子 北垣 徹 森本 淳生
12月1日	植民地論としての台湾宗教研究——迷信習と民心徳義の狭間に Timothy Tsu 応用人類学の系譜——Temple, African Survey, Rhodes Livingstone Institute	田中	東 方 部	
			六朝隋唐精神史 中国近代社会思想研究 南アジア亜大陸北西地方の歴史考古学研究	吉川 忠夫 狭間 直樹

人 文 学 報

中国古代の伝承文化研究

原始仏教起源論

中国美術の様式と意味

中国建築の様式・技術・空間

近代中国の綿紡織業

道教思想研究

敦煌写体の言語史的研究

新漢字コード系の構築

中国古代中世の法制

先秦時代の金文

中国の小説、演劇及び講唱文学の演変

清代の文化と社会

古代中国の考古学研究

中国科学の基礎理論

近世中国の財政と社会

インド・中国における唯識仏教の基盤と背景

明清時代の官僚制度

中国中世学術史の研究

中国小学史

中国仏教美術の研究

前近代朝鮮の政治制度と社会制度

海派小説研究

ムガル朝時代の歴史叙述の研究

中国近代の社会・文化構造

栁山 正進

小南 一郎

荒牧 典俊

曾布川 寛

田中 淡

森 時彦

麥谷 邦夫

高田 時雄

勝村 哲也

富谷 至

浅原 達郎

金 文京

井波 陵一

岡村 秀典

武田 時昌

岩井 茂樹

船山 徹

谷井 陽子

木島 史雄

森賀 一恵

稲本 泰生

矢木 毅

濱田 麻矢

真下 裕之

高嶋 航

開所68周年記念公開講演会

1997年11月6日

於 本館大会議室

中世ヴェネツィアにおける市民の「家」—都市

国家理解に向けて— 高田京比子

1930年代の日本とジェントルマン資本主義—綿

業通商摩擦問題を中心に— 籠谷 直人

「大乘起信論」批判—阿梨耶識は如来像にあら

ず— 荒牧 典俊

研究成果の刊行

I 紀 要

人文学報 第79号

1940年代日本植民地帝国の諸相

「大東亜金融圏」論 山本 有造

満洲中央銀行と朝鮮銀行— 日中戦争・アジア太平

洋戦争期を中心に— 安富 歩

植民地時代末期台湾工業の構造— 国民党の接收記

録を利用して— やまだあつし

戦時期の植民地支配と「内外地行政一元化」

水野 直樹

日中・太平洋戦争期における樺太行政の展開

平井 廣一

植民地末期朝鮮におけるある転向者の運動

— 姜永錫と日本国体学・東亜連盟運動—

松田 利彦

日本占領期フィリピンの現地調査 盛田 良治

1940年代初期の日本綿布取引をめぐるアジア通商

網— 日本綿布輸出組合「南方地域向取引調」の検

討— 籠谷 直人

帝国の断絶と連続— 北朝鮮の場合— 木村 光彦

鞍山日本人鉄鋼技術者たちの留用問題— 中国東北

鉄鋼業の戦後復興— 松本 俊郎

事 業 概 況

夏期公開講座

1997年7月

於 本館大会議室

—メイド・イン・ジャパンの亜細亜—

4日 アジア伝説—神功皇后からハリマオまで—

山室 信一

江戸期庶民の朝鮮像

イリノイ大学教授 ロナルド・トビ

5日 明治漢学者のみた儒教の祖国

関西大学助教授 陶 徳民

日本語論のなかのアジア像 安田 敏朗

人文学報 第80号

大政奉還と討幕密勅

佐々木 克

伊藤博文滞欧憲法調査の考察

瀧井 一博

「国語」・「日本語」・「東亜共通語」— 帝国日本

の言語編制・試論—

安田 敏朗

彙 報

- 椀貸し伝説再考——近代における伝説の生成と受容
—— 川村 清志 1996年12月20日刊
過剰決定から構造的因果性へ 前川 真行 所報「人文」第43号
彙報（1996年1月～1996年12月） 1997年3月31日刊

東方学報 第69号

- 干寶「搜神記」の編纂（上） 小南 一郎
『棟亨五種』の同校者たち 井波 陵一
六朝藝術論における氣の問題 宇佐美文理
北魏河南の一光三尊像 石松日奈子
寶山靈泉寺石窟塔銘の研究
—隋唐時代の寶山靈泉寺 大内 文雄
優填王像東傳考
—中國初唐期を中心に— 稻本 泰生
湖北陰湘城遺址研究（Ⅰ）
——一九九五年日中聯合考古發掘報告——
岡村 秀典・張 緒球編

東洋学文献センター叢刊第6冊

中国造園史文献目録 田中 淡編

1997年4月30日刊

東洋学文献センター叢刊第7冊

梵蒂岡図書館所蔵漢籍目録補編 高田時雄編

1997年5月25日刊

THE MAIN STŪPA ŌF SHĀH-JĪ-KĪ DHE-
RĪ A Chronological Outlook

1997年刊行

栗山正進編

元史刑法志譯注稿（三）

「中國近世の法制と社會」研究班

『眞誥』譯注稿（二） 「六朝道教の研究」研究班
彙報（1996年1月～1996年12月）

ZINBUN（歐文紀要） No.31

- Yasuke IKARI, Vādhūla Śrautasūtra 1.5-1.6
[Agnihotra, Agnyupasthāna]
—A New Critical Edition of the Vādhūla
Śrautasūtra, II—
Paisley LIVINGSTON, Arguing over Intentions
Toru KITAGAKI, Alfred Fouillée et
l'idéal républicaine
Atsuo MORIMOTO, Signe et Opération.
Une étude du formalisme valéryen
à l'époque des premiers Cahiers
INSTITUTE FOR RESEARCH IN HUMANITIES,
STAFF AND SEMINARS

Ⅱ 研究報告その他

前近代中国の刑罰

梅原 郁編

所 員 動 静

- ・梅原 郁教授（東方部）は、停年退官（3月31日付）京都大学名誉教授の称号を授与（4月1日付）。
- ・谷 泰教授（西洋部）は、停年退官（3月31日付）京都大学名誉教授の称号を授与（4月1日付）。
- ・藤田隆則助手（西洋部）は、辞任（3月31日付）の上、大阪国際女子大学助教授に就任。
- ・石川禎浩助手（東方部）は、神戸大学文学部助教授に昇任（4月1日付）。
- ・齋藤希史助手（日本部）は、奈良女子大学文学部講師に昇任（4月1日付）。
- ・横手 裕助手（東方部）は、千葉大学文学部助教授に昇任（4月1日付）。
- ・山本有造教授（日本部）を当研究所長及び附属東洋学文献センター長に併任（4月1日～1999年3月31日）。
- ・麥谷邦夫助教授（東方部）は、教授に昇任（4月1日付）。
- ・高田時雄助教授（東方部）は、教授に昇任（4月1日付）。
- ・山路勝彦関西学院大学教授は、併任教授（比較文化研究部門、4月1日～1998年3月31日）。

- ・鈴木祥二名古屋大学助教授は、併任助教授（比較文化研究部門、4月1日～1998年3月31日）。
- ・小林博行氏を助手（日本部）に採用（4月1日付）。
- ・濱田麻矢氏を助手（東方部）に採用（4月1日付）。
- ・梶浦 晋氏を助手（附属東洋学文献センター）に採用（4月1日付）。
- ・新井晋司助手（東方部）は、6月30日付辞職。
- ・安富 歩助手（日本部）は、名古屋大学情報文化学部助教授に昇任（11月1日付）。
- ・真下裕之氏を助手（東方部）に採用（11月1日付）。
- ・高嶋 航氏を助手（東方部）に採用（11月1日付）。
- ・石川禎浩助手（東方部）は、1月7日大阪発、社会科学院近代史研究所、社会学研究所、北京図書館、北京大学、中央大会址記念館、上海図書館、上海市档案馆に於いて中国近代史関係資料調査及び収集を行い、1月18日帰国。
- ・山室信一助教授（日本部）は、文部省科学研究費補助金により、平成8年12月21日大阪発、シンガポール周辺、イスタンブール周辺、コロンボ周辺、香港市内に於いて地域開発と異文化共存に関する実態調査研究を行い、1月25日帰国。
- ・岡村秀典助教授（東方部）は、1月20日大阪発、四川省文物考古研究所に於いて三星堆出土品の調査、上海博物館に於いて文物の研究を行い、1月31日帰国。
- ・木島史雄助手（東方部）は、1月27日大阪発、ウィーン大学、ウィーン国立図書館、美術史美術館、ハイデルベルク大学、グーテンベルク印刷博物館、ラウレンツィアナ図書館、マルセリアナ図書館、サンマルコ修道院、ウフィッツィ美術館に於いて東西の書物及び書物史の研究資料収集を行い、2月18日帰国。
- ・籠谷直人助教授（日本部）は、2月15日大阪発、シンガポール国立大学に於いて研究会「1930年代のシンガポールにおける日本」に参加、2月20日帰国。
- ・木島史雄助手（東方部）は、2月21日大阪発、上海博物館に於いて石経に関する研究資料収集を行い、2月24日帰国。
- ・田中 淡教授（東方部）は、2月22日大阪発、三省平遥古城に於いて平遥古城のユネスコ世界遺産選定に伴う現地調査、ユネスコ中国委員会に於いて調査打合せ及び調査報告を行い、2月28日帰国。
- ・梅原 郁教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、3月2日大阪発、インド国立博物館に於いてスタイン将来中央アジア資料の調査及び資料収集を行い、3月10日帰国。
- ・富谷 至助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、3月2日大阪発、インド国立博物館に於いて中央アジア出土資料調査、スウェーデン民族学博物館に於いてスウェン・ヘディン関係資料の調査及び研究打合せを行い、3月13日帰国。
- ・栗山正進教授（東方部）は、3月9日大阪発、ブリティッシュ・ライブラリーに於いてガンダーラ寺院資料の収集を行い、3月17日帰国。
- ・高田時雄助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、3月13日大阪発、ローマ国立図書館に於いて漢籍調査を行い、3月24日帰国。
- ・船山 徹助手（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、3月16日大阪発、プリンス・オヴ・ウェールズ博物館、インド国立博物館、マトゥラー博物館に於いて遺物調査、サーンチー遺跡に於いて仏教寺院遺跡調査を行い、3月25日帰国。
- ・稲本泰生助手（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、3月16日大阪発、プリンス・オヴ・ウェールズ博物館、インド国立博物館、マトゥラー博物館に於いて遺物調査、サーンチー遺跡に於いて仏教寺院遺跡調査を行い、3月25日帰国。
- ・金 文京助教授（東方部）は、3月20日大阪発、高麗大学校言語文化研究所、ソウル大学校に於いて研究資料収集及び意見交換を行い、3月28日帰国。
- ・大浦康介助教授（西洋部）は、在外研究員旅費により、平成8年6月1日大阪発、フランス国立科学研究センターに於いて文学・芸術理論に関する研究を行い、3月31日帰国。
- ・田中雅一助教授（西洋部）は、3月18日大阪発、シンガポール国立大学に於いてシンガポールの社会科学の現状についての調査及び交流を行い、3月31日帰国。
- ・藤井正人助教授（西洋部）は、3月20日大阪発、

- パニヤール村近郊に於いてサーマヴェーダ伝承研究調査を行い、4月7日帰国。
- ・狭間直樹教授（東方部）は、3月28日大阪発、中央研究所、近代史研究所、台湾大学、台北師範大学、屏東師範大学に於いて中国近代史に関する研究資料収集及び交流を行い、4月10日帰国。
 - ・井狩彌介教授（西洋部）は、委任経理金により、4月3日大阪発、トリチュール近郊、バンガロール近郊、マイソール大学図書館、ハンピ近郊、マドラス大学写本図書館に於いて「ヴェーダ伝承」と写本調査を行い、4月28日帰国。
 - ・岡村秀典助教授（東方部）は、4月25日福岡発、荊州博物館に於いて城郭遺跡の陰湘城発掘調査打合せ及び遺物整理、銅緑山博物館に於いて資料整理及び資料調査、北京大学に於いて発掘打合せを行い、5月9日帰国。
 - ・稲本泰生助手（東方部）は、7月27日成田発、龍門石窟に於いて古陽洞調査を行い、8月2日帰国。
 - ・谷井陽子助手（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、8月1日大阪発、中国社会科学院歴史研究所、遼寧省檔案館に於いて明清時代中国の地方檔案の調査を行い、8月14日帰国。
 - ・前川和也教授（西洋部）は、委任経理金により、7月14日大阪発、大英博物館に於いて館蔵シュメール楔形文字テキストの研究を行い、8月18日帰国。
 - ・富谷 至助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、8月6日大阪発、武威市博物館、山丹博物館、居延一帯、嘉峪関博物館、敦煌一帯、省博物館に於いて漢代遺址の調査を行い、8月20日帰国。
 - ・北垣 徹助手（西洋部）は、委任経理金により、7月17日大阪発、フランス国立図書館、サント・ジュスヴィエーヴ図書館に於いて第三共和政期の新カント派共和思想に関する文献調査及び資料収集、パリ社会科学高等研究所レイモン・アロン政治研究センターに於いて情報交換を行い、8月21日帰国。
 - ・山室信一助教授（日本部）は、文部省科学研究費補助金により、8月1日大阪発、香港市内、カルカッタ周辺、バクドクラ周辺、デリー周辺、シンガポール周辺、インドネシア周辺に於いて地域開発と異文化共存に関する実態調査研究を行い、8月23日帰国。
 - ・岩井茂樹助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、8月3日大阪発、中国社会科学院歴史研究所、中国第一歴史檔案館、四川省檔案館、四川省図書館、上海図書館に於いて清代檔案及び史籍調査を行い、8月23日帰国。
 - ・田中雅一助教授（西洋部）は、文部省科学研究費補助金により、7月23日大阪発、大英博物館に於いて人類学部門での写真研究を行い、8月31日帰国。
 - ・勝村哲也助教授（附属東洋学文献センター）は、文部省科学研究費補助金により、8月25日大阪発、タマサート大学、シンガポール大学に於いて漢字データベースの国際交換システム構築を行い、8月31日帰国。
 - ・岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、8月20日大阪発、中国社会科学院考古研究所、洛陽工作站、河南省文物考古研究所、安陽工作站、北京大学に於いて中国古代都市の考古学的調査を行い、9月3日帰国。
 - ・高田京比子助手（西洋部）は、7月20日大阪発、パドヴァ大学史学科に於いて中世史の研究セミナーに参加、ヴェネツィア古文書館に於いて中世ヴェネツィア社会史に関する史料調査、ポーロニャ大学に於いて打合せを行い、9月7日帰国。
 - ・森本淳生助手（西洋部）は、9月1日大阪発、フランス国立図書館に於いてポール・ヴァレリーと同時代思想に関する研究を行い、9月30日帰国。
 - ・木島史雄助手（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、10月20日大阪発、ソウル大学校奎章閣、ソウル国立中央図書館、高麗大学校、延世大学校、誠庵文庫、故宮、ソウル国立中央博物館に於いて新漢字コード系構築のための資料収集を行い、10月24日帰国。
 - ・小林博行助手（日本部）は、文部省科学研究費補助金により、10月20日大阪発、ソウル大学校奎章閣、ソウル国立中央図書館、高麗大学校、延世大学校、誠庵文庫、故宮、ソウル国立中央博物館に於いて新漢字コード系構築のための資料収集を行い、10月24日帰国。

- ・金 文京助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、10月20日大阪発、ソウル大学校、高麗大学校に於いて所蔵書籍の閲覧及び調査を行い、嶺南大学校に於いて中国文学文体論的再照明国際学術大会参加及び論文発表を行い、10月27日帰国。
- ・安富 歩助手（日本部）は、平成8年10月29日大阪発、ロンドン大学経済学部附属サントリー・トヨタ国際センターに於いて「兩大戦間期の上海金融市場」についての調査研究を行い、10月28日帰国。
- ・高田時雄教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、10月28日大阪発、ローマ国立図書館、フィレンツェ国立図書館、キヨソネ博物館に於いて漢籍調査を行い、11月11日帰国。
- ・勝村哲也助教授（附属東洋学文献センター）は、文部省科学研究費補助金により、11月17日大阪発、サンフランシスコ市立大学パークレー校に於いて「楊守敬図及び嘉慶同光疆域図の電子化についてのワークショップ」に出席、スタンフォード大学に於いてヨーロッパ人のアジア探検に関する資料収集を行い、11月25日帰国。
- ・籠谷直人助教授（日本部）は、文部省科学研究費補助金により、11月25日大阪発、中央研究院近代史研究所、国立中央図書館台湾分館に於いて南洋華僑に関する国際共同研究のあり方についてのレビューを行い、11月29日帰国。
- ・岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、11月8日大阪発、荊州博物館、北京大学に於いて陰湘城遺跡の調査及び検討を行い、12月2日帰国。
- ・濱田麻矢助手（東方部）は、12月3日大阪発、香港大学アジア研究センターに於いてInternational Conference on Hong Kong and Main Chinaに出席、上海図書館に於いて資料収集、香港大学中文系に於いて70周年記念学術討論会に出席し、12月13日帰国。
- ・金 文京助教授（東方部）は、12月9日大阪発、香港大学に於いて70周年記念学術討論会に出席及び論文発表を行い、12月16日帰国。
- ・横山俊夫助教授（日本部）は、文部省科学研究費補助金により、12月22日大阪発、福建省師範大学に於いて大学内の民俗研究家によるレビューを受け、あわせて関連史跡の見学を行い、12月27日帰国。